

家のヒューマニズム

馬 場 喜 之

家のヒューマニズム《Haus-Humanismus》。この耳慣れない言葉。おそらくはまだ一度も語られたことのない言葉。——この言葉、家のヒューマニズムなる概念が、どういう内容をもつものであるかを、少しでも、はっきりさせようというのが本稿の目的である。それには、先ず、家のヒューマニズムという概念が発想されるにいたった経緯、それから他のもろもろのヒューマニズムの思想との関連、そして特に、この《家のヒューマニズム》なるものの核心が、実存哲学 Existenzphilosophie——20世紀中葉に万人に少くとも一度は一考の価値を要請した哲学ノ——における空間性の恢復という問題と、意味深く触れ合うものであることを指摘してみたいとおもう。

1) 私は、家政学や家政学部——大学論の一部としての——について考えているうちに《家の思想》 Gedanken des Hauses にたどりついた。(家政学については、「人間の学としての家政学」「Eugenics/Home Economics/Domestic Science」など。家政学部論については「“ある大学づくり”の大学論」「ポイエシスの大学像」など。)

以上のような諸考察の期間、私の意識の底流にあったものは、或いは別のいい方をすれば、私のおかれていた状況は次のようなものである。家政学は新興科学であって、目下その独自の方法論が模索されており、いつの日にかそれが完成されるであろうといわれているが、果してそうであろうか。また家政学は結局は雑学的であるのだが、学問 Wissenschaft として純粋化した形でとらえるとすれば自然科学に帰着するという考え方があるが、これは満足すべき結論であろうか。或いはまた逆に、家政学は社会科学の一分野に他ならない、そして就中家族関係が固有の対象である、という考え方があるが、この結論ですべてを片付けてしまってよいものであろうか。一方また、そもそも家政学の実情は非常に技術的な事柄によって占められている比率が高いというのであるのに、そういうところへ、このような理論はどこまで、またどんな形で、滲透してゆきうるのかがまた問題である。というのは、上のような論者、家政学の理論家たちは、おおむね、いわゆる家政学当事者たちではない。経済学者であったり、社会学者であったり、応用化学者であったり、である。非常に多くの家政学当事者たちはいまだなお理論的関心からは遠いところに存在しているようにおもわれる。けれどもアリストテレス Aristoteles がいっているように、人間は「経験 empeiria より技術 technē」、そしてまた「経験より科学 epistēmē」をつくり出すものであるとするならば、家政学当事者たちの中からこそ、その理論的反省として、よりすぐれた、より一般性のある家政学理論がきかれうることを期待すべきかも知れない。分野はちがうが、ルフエブル H. Lefebvre が、すぐれた芸術論乃至美学を、自己の体系の枠内のこととして芸術論や美学をもつ哲学者からでなく、芸術家や作家それ自身から期待したように。われわれはそれを期待すべきであろう。しかしいつまでか。もちろん急であってはならないとおもう。がきて、そういうことでもあるので、家政学

についての考察を、すでにあるのとは別様に、開始してみてもよいわけであろう。

そんなわけで私は、現にあるところの、an sich の家政学を概観することを通じて、家政学の学問的充実のかなめは、an sich の諸家政学の内部的諸問題にかかわることではなく、それらを統一する見地を正しく把握することだと考えたり（「人間の学としての家政学」）、また家政学という語義そのものの各国における相異を分析検討して、比較家政学という視点が大事であることをみてみたり（「Eugenics/Home Economics/Domestic Science」）、したのであった。①

が、それらはいわば、私としては過渡期であって、私はそれらを媒介として、次の段階に進んだのである。すなわち――

家政学がこのように問題になるということは、家政学の内部のこととは別であるということに気付く必要がある。このいい方ではまだあいまいであるかも知れない。そもそも何故家政学論議が起ってきたかということに目を向けることが重要である。家政学部の誕生がうながされ、その上にそれが一つの自己主張を持ち始めたのは何故かということである。その問いを前にし、その根底にあるものに注目するならば、そのときまさに《家の思想》とでもいうべきものを感得するであろう。家政学を語ることにおける情熱は、もしその語ることが積極的な姿勢をもつ限り、意識するとしないうちに拘わらず、《家の思想》に根差している筈である。

家政学の成立する現実的基盤であるところの家庭。家庭における生活。家庭生活の種々相における重要な意味。家庭生活が市民生活とか公民生活、国民生活（臣民生活！）とかいわれてきたものに対して、よりすぐれてもつところの人間性上の価値の新たなる発見。そういう発見に対する新鮮なる感動。そういうものがなかったならば、家政学に対する情熱は起って来なかったであろうし、起りうる筈のものではないであろうし、一時的に起ったとしてもまた忽ち消えてしまったであろう、或いは消えてしまうことであろう。――そういう意味からは家政学の成立する現実的基盤であるところの家庭・家庭生活は、また同時に、家政学の成立する精神的基盤でもあるのだ。――ここまでくれば家政学の将来に対する見通しははっきりしてくる。家政学が将来、科学の中で大きな分野を占めるようになるかどうかは、《家の思想》が尊重され、深められ、多くの人々の共通の理解をよび起し、思想全般の世界の中で有力になるかどうかにかかっているであろう。このことは、他の分野でのダーウィン Ch. Darwin (1809—1882) やマルクス K. Marx (1818—1883) の事例ともアナログスに考えられるのである。すなわち、生物進化の思想はラマルク J. B. Lamarck (1744—1829) などを経て、19世紀のダーウィンにいたり決定的になり広く唱道されるにいたったのであるが、進化論は一つの思想であって、それが直ちに生物学ではない。むしろその後の生物学、近代生物学がそれをふまえて前進、発展する原動力となった――その上に宗教・道徳上にも大影響を与えたこともすでに周知の事実であるがここでの問題ではない――そういう思想である。また、マルクスの思想は直ちに経済学ではない。ここでもまたマルクスの思想の哲学的側面や宗教的側面は措くとして、経済学的側面だけをとり上げてみても、それは歴史、社会、そして人間の学なのである。つまり一つの経済的人間の包括的思想であって、以後いわゆる経済学発展の強大な原動力となったものである。マルクスやダーウィンに匹敵する《家の思想》家が、ハイデツガーのいい方をかりれば、歴史の命運に応じて出現することほど、家政学にとって幸いすることはないであろう。

家のヒューマニズムについて述べるというふれこみでありながら、もっぱら《家の思想》が語られた。しかし実は家のヒューマニズムとはこの《家の思想》の別のいい方、《家の思想》に属しつつある特殊な視点から再構成してみたものだといってよいものである。すなわちヒューマニズムというもののもつ視点がここで問題になる。

2) ヒューマニズムの古典的・原初の表現は、ローマのテレンティウス Terentius の「私は人間である。人間的なものは何一つ私の関心の外にあることはできない」“homo sum, humani nihil a me alienum puto.” にあるといわれているように、人間に関すること (humanity) が中心にあることはもはやいうまでもないが、その具体的内容はこれだけではまだあいまいである。ヒューマニズムという言葉は実は19世紀の造語であるといわれているように、遡って古代の思想にあてはめることは危険なわけである。19世紀のそのヒューマニズムという語も、先ず、主として14世紀から16世紀にかけてのヨーロッパにおけるかの文芸復興 renaissance の運動を指していた。つまりギリシャ・ラテン文学の復興であり、そして当時の (ルネッサンス期の) ヒューマニストたちは、キケロ Cicero が抱いていた観念、litterae (文学的素養) と humanitas (人間的教養) とを同一視する考え方を無理なくうけ継ぎえたのであって、その結果大学には神学 (Divinity) に対して人文学 (Humanity) ができるに至った。ギリシャ・ラテンの古典に対して関心を払うことをヒューマニズムとよぶ伝統はこのときでき上り、19世紀の再自覚を経て今日にもおよんでいる。②

しかし、このいわばオルソドキシイなヒューマニズムの語の使い方に反して、人間の自由をもとめ、人間をさまざまな外的桎梏から解放し、さまざまな疎外の状況から解放しようとする思想運動をこそヒューマニズムとよぶことが今日の通念であるかにみえる。人間を尊重し、人間の生活に好意・愛情にみちた肯定を与える思想、こういったものをヒューマニズムだとおもう方が今日すでにわれわれになじみ深いものになっているようである。ではこの二つは無縁かという決してそうではなく次のように考えれば、この二つはある系譜上にたくみにつながってしまうことができる。「ヒューマニズムは、人間疎外原因との実践的対抗運動の中で自らの内容を形成していくものである。従って、疎外の元凶は何かの問いに正しく応答することによって、各時代におけるヒューマニズムの内容原理を明らかにすることができる。ルネッサンス・ヒューマニズムは神文 (litterae divinae, Divina) による人間疎外に対抗することによって人文 (litterae humaniores, Humaniora) を再興しようとした。ヒューマニズムは、封建遺制と絶対主義体制とたたかうことによって基本的人権の尊厳性を自覚化した。現代ヒューマニズムは階級的人間疎外からの人間解放の実践運動をとおして無階級の人類社会の実現をもとめるものである」。③

さてわれわれは、これから先、今日の通念的なヒューマニズムの観念に従って話を進めて行かう。そこで問題となるのは、家のヒューマニズムは、《家の思想》をどういう風に再構成しようとするものであるか。また、家のヒューマニズムは、上の如き現代ヒューマニズムにとどまらず、これまでのいろいろなヒューマニズムとどういう関係にあるのか。もっと具体的にいえば、家のヒューマニズムはこれまでのヒューマニズムから何をとり入れようとするのか、またどう改鑄してとり入れようとするのか、ということである。

先ずあとの方からとり上げる。上の引用文にあらわれた限りでは、現代ヒューマニズムは、あたかも階級的視点につきるような印象を与える。たしかに今日、階級を度外視する一切の思想は説得力を欠き非現実的である。ところで私は、最近マルクス主義について書いた小文を次のように結んだ。「……もしマルクスの主旨を現段階に生かしていれば次のようにいえるのではなからうか。ある階級が人間的疎外の状態にあるとき、歴史は目標に達せずとされたが、ある民族が、さらにはある人種が疎外されてあるとき、人類の歴史は暁を迎えぬままであろう。そして個人的近代的市民の人間の疎外からの回復が、実は階級疎外の克服なくしてはありえないものだ」とされたごとく、階級疎外

は、民族の疎外、さらには人種の疎外の解決なくしてはその真の克服はありえないと考える。それらなくしては人類の歴史の名誉は恢復されないであろう。」④ つまり私は現代的状況に照らして、階級を唯一の視点とすることへの**実感的**アンチテーゼを提出してみたかったのである。しかしもちろん、階級的ヒューマニズム、或はプロレタリア・ヒューマニズムに結びついている労働尊重の精神、労働こそが一切の価値の源泉であるという考えを継承することに決してためらいがあってはならない。

さてまた、さきの引用文が歴史的にたどった他のヒューマニズムの内実、すなわち基本的人権の尊重、それを哲学的に定式化したカント I. Kant (1724—1804) の道徳的自律的理性的存在としての人間の人格 *Persönlichkeit* の至上性の確認、はもとより、ギリシャ・ラテンの古典文学の教養というものも、いちがいに、家のヒューマニズムが継承すべきものの範囲外にあるということではできない。それらが単なる歴史的なことがらとなってしまうのでないことはもちろんである⑤。また、現代において、その本来の倫理的中立性が、否定的に作用する要因の増大によって悪名高くなりつつある科学的ヒューマニズム——技術と結びついて人間生活に奉仕することが本来のたてまえであった——からも、家のヒューマニズムが受け入れるべきことがたくさんある。

ところがここに至って反論が生じよう。それではまるで、家のヒューマニズムは独自の視点からの再構成どころか、だらしのない、無節操の折衷にほかならず、新鮮な味わいのないごった煮ではないかと。それに答えるには、もう一度《家の思想》に立ちかえるつもりであった。

3) 最初、私は家政学を通じて《家の思想》にきたと語ったが、実は《家の思想》はそれに先立って形成されていたようにおもう。家政学を通じて、その根本に、家政学を衝きうごかす一つの思想領域を感得したとき、ごく自然に、その思想領域が先在の《家の思想》と合流したのであった、といひ直したい。

なお、ここで家政学と《家の思想》との関係においては、私は《家の思想》なくしては家政学は有力なまた魅力と価値を備えた学問となることはできず、断片的な、消費財的な知識として空中分解をとげてしまうものであることを重ねて強調しておきたい。今年——1963年——いわゆる家庭論争の主役となった大熊信行氏の所説が、家政学の分野では未だ何ら積極的な結実を予想せしめないにもかかわらず、多少とも他の論者と異なる *Positivität* をもつとしたら、全く、私が《家の思想》とよぶところものに関説しているからにほかならない⑥。

氏は国家悪、国家的忠誠の問題を通じて《家の思想》にきた。背後に核時代意識がある。この核時代意識はおそらく現代人の誰もがもっているものであるが、あくまで持続的に、そして思想の論理の中に有機的にくみこませうかどうかによって差異が生じてくるものなのである。さて国家は制度として戦争をもつ。しかるに核時代においては戦争は死に通ずる。それ故に国家中心の発想になる思想には末来的生命を認めることはできない。かわって生命再生産の場としての家を正しく認識し直すべきである。経済学はこれまで家を単に消費の単位としてとらえたにすぎなかったがこれは間違いである。生命再生産の場である家は平和に通じ、家中心の発想による思想にこそわれわれは期待を寄せることができる。国家—戦争—死 家—平和—一生 の各系にもう一項ずつつけ加えるとすれば、男性と女性である。このことから男性の女性化ということが歴史的に一つの倫理的要請となる。

この思想からいかなる家政学が生い育つか、そしてまたその家政学とこの思想とがどんな弁証法的関係を保っていくかは注目し値するがここでの問題ではありえない。私は、私がそもそも《家の思想》にきたところのものに移ってゆきたい。

私は、ひとたび、「哲学史の中の女性像」（理想社、1960）を書いていたとき、ヘーゲルの章のとき、かれの「精神現象学」の中の「神々のおきてと人間のおきて」の論理を媒介として《家の思想》にきた。それはヘーゲルがギリシャ悲劇に取り組んだ結果のものであるが、ソフォクレスの「アンチゴネ」によって、神々のおきてを守る女性は、人間のおきてを守る国家に対立し、国法にそむかねば肉親・家族の者の埋葬を行うことができない倫理的矛盾を追求している。ここでも家と女性との結びつきがある。神々のおきての具頭の場としての家と女性。さて、この二つ（神々のおきてと人間のおきて）はヘーゲルの思考の文脈の中ではともに没落してゆくものであるが、直接的印象では、家の永遠的意義を鮮やかに浮彫りしていたのであって、家の存在の倫理性をあますところなく語っている。

もうひとたびは、ニイチエ F. Nietzsche (1844—1900) の生涯をみつめながらである。⑦ 先ずごく大雑把にかれの生涯の輪廓をみると、25才にして大学にて文献学に精通、直ちに古典文献学の教授として招へいされる。30才にして退職。あとはもっぱら漂泊の生活。1888年発狂、1900年死。もちろんその間に結婚なし。——普通ならば25才にして教授職ということは殆んど考えられぬ。ニイチエの天才を以てして始めて可能であったことであろう。だがこの余りに早すぎるれっきとした公職体験はニイチエの性（しょう）に合わなくなる。普通なら錨を下ろす年代に、かれはむしろ錨を引き上げて大海に乗り出す。⑧ コロンブスの精神——かれのいい方では Freigeist —— がかれの中に息づく。認識のドン・ファンとして、一定の真理にとどまることができず、つねに新たに問うことに駆り立てられる。などなど、ニイチエの存在の独自性、問題性は語り切れぬほど豊饒な内容のものであろう。しかし、われわれは単にそうした豊饒さの魅力に惑溺することはできないのである。錨を引き上げた生活、すなわち、家のない生活そのものに懐疑の矢を放つ。家のない生活における思想、それはその中に人の住むことのできない思想ではないのか。ヤスパースが、ニイチエを「それを凝視しないことは非誠実であるが、それに従うことはできない例外者 Ausnahme」とみなした意味は、この点をついたものと解される。思想もまた、そこに一般者の住みうる家でなければならぬのである。そしてまた思想は、それが真である限り、人間を地上の一角に住まわせるものであり、そのそれぞれの地上の一角こそ、家とよんでよいものであろう。これは家のメタフィジックな概念であるが、現実的な家もこの概念を容れうるものでなくてはならない。

なおそのほかにも、私の中には、整理されない形で、それを介して《家の思想》にきたところのものがある。しかしここでは上の二例にとどめておく。

4) いまや実存哲学が語られる時点である。ヤスパース K. Jaspers (1883—) やハイデッガー M. Heidegger (1889—) の哲学が真理を時間性の地平で究明した功績についてはすでに大きい評価が与えられている。ハイデッガーの「存在と時間」、ヤスパースの「哲学」はそれぞれ伝統的な存在問題を時間性を本質とする人間の現存在、あるいは実存との関係において取り扱い、新しい視野を開拓した。しかし実存哲学は時間性の偏重だともいわれる。ボルノウ F. Bollnow のような実存哲学のよき理解者もその点を指摘し、空間性の契機を恢復することを実存哲学に要求している。⑨ 空間性をどのように考えるかによって、その方向も異なってくるであろうが、私はむしろ、実存哲学の最初の形成期にそれと気づかれずにねむっている要素をほり起してみることでも、ここでは、充分ではないかとおもうのである。そしてそれは家のヒューマニズムの中核にもつきあたるものである。

さてキルケゴール Kierkegaard (1813—1855) の Einzelne から出発したヤスパースの倫理思想の中核には愛の唯一性 Einzigkeit der Liebe がある。これは同時に愛の Ernst 厳粛さである。絶

対的意識である愛をまって始めて Existenz の交わりは可能であるのであるが、特に男性と女性との出会いにおけるかけがえのない必然性をこの言葉でいいあてたものとみることができる。キルケゴールの Du との絶対的出会いは神であり、そのような神との出会いを保証するものとして真正の教会があるべきである——キルケゴールにとってはついにそれは現実に存在しなかったものであるが。ヤスパースにおいて愛の唯一性において結ばれる事態と相即の形態である家は、キルケゴールの教会と類比的な宗教的・倫理的な意味合いをもったものである。

家は先ず以て Einzelne である実存が他の実存と出会って住むところのものである。ここに実存哲学と《家の思想》との不可分の関係がある。

さて次にハイデッガーをよび出してくるとなると、すでに一般的にいわれているように、かれの“Über den Humanismus”は“ヒューマニズムについて”ではなく“ヒューマニズムを超えて”であって、ハイデッガーはヒューマニズムについて同情をもっていない、ヒューマニズムの次元での思想活動は、今日のやたらに街中に事務所をもちたがる知識人、文化人のさわがしいわめきであって、思考の本義からは遠く逸脱している、ということになるわけであるが、それにもかかわらず、かれの思想の中から家のヒューマニズムを射あてているものを探し出すのに、さほど労苦を要しないのである。

ハイデッガーの場合には端的に〈住む〉wohnen という思想がある。(但しこれはハイデッガーの後期の思想に属する。)ハイデッガーはいう、詩は存在の言葉、言葉は存在の住い、詩人は dichtend しつつ住まう。

またいう、詩人——家の友、そして家は人間の本質的な営みがなされえてこそ家である。

何よりもこの住まいの思想、地上の一角に根を下ろす思想、ここには新しい出発点がある。しかし人間は誰しも詩人たりうるであろうか。詩人は哲学者と同じく、いなむしろ本質的にはそれ以上にかたい存在なのではないか。しかしハイデッガーは詩集を公刊する詩人ばかりをいっているのではない。かれが心をこめて語るのは無名の詩人のことである。そして人間である限り、existiere (脱自・超出)する人間存在 Dasein である限り、人間はみんな詩人なのである。ここに再び実存の人間と家、実存哲学と《家の思想》が重なり合うのである。

かくして家のヒューマニズムの主体は単なる個人主義的個人を超えたものである。しかし個人を忘れるものではないどころか実存である個人に出発する。そして階級、民族、人種の範疇をこえ、それらの契機を未来の条件において改変しつつ包容しうるものであるだろう。

家のヒューマニズムという言葉はたしかにまだ耳慣れないものであろう。上述によって、どこまでその内容をはっきりさせえたか、あやぶまれるが、私はこの語とその思想に豊かな未来性を感じている。またの機会にさらに論究を行いたい。

註 ① 「人間の学としての家政学」以下私の試論は何れ一著にまとめて公けにしたいとおもっているが、とりあえず、「人間の学としての家政学」と「ポイエシスの大学像」は、実存主義協会会誌“実存主義”に掲載予定。なお「ある大学づくり」の大学論は東京家政大学学生新聞第7号—1963.7.10—に掲載されている。

② この部分、ピーター・ミルワード「シェイクスピアのヒューマニズム」“ソフィア”XI-3—1962—によるところが多い。

③ 工藤綏夫「現代ヒューマニズムの倫理をめぐって」“理想”No. 354 p.9—10—1962.11—

④ 「哲学」(共著)の中の「社会主義」の項、協同出版より公刊予定(1964)。

⑤ ギリシャ・ローマの古典の教養をとりあげることの反現代性をいう人はあるいは多いかも知れない。

すでにゲーテさえも「教育州」（「ウイヘルム・マイスター」の中の）の学校において、古代語が必須科目から除いている。しかしトマス・マンはこれを反語にとる。「人間の美と理性的尊厳とに対する潑刺とした感覚と、古代言語学に対する興味との内面的な、ほとんど神秘的なといったいい関係」について想起し、「言語のパッションと人間的なパッションとの精神的な並列の上に教育の理念が完成される」ことを力説する。事実、新しくよみ返えしてみると、ヨーロッパの教養が普遍人間的な体験とみた旧約・新約聖書とホーマー、またアイスキロス・ソフォクレスなどの作品の中に、家政学を養いそだてる《家の思想》に必要な文献を見出すことは決して困難ではないのである。

- ⑥ 大熊信行氏を中心とする家庭論争とは、先づ氏の「家の再発見」（“朝日ジャーナル” 1963. 1. 20号）に始まり、それをも収めた単行書「家庭論」（新樹社）（1963. 8）によってさらに大きな波紋となり、反論も盛におこり、それらを総括した一文「家庭論争を超えて」（“朝日ジャーナル” 1963. 9. 29号）が氏によって書かれたが、もとよりこれで終わったわけではない。この家庭論争は多分にジャーナルスチックな色彩をおびたものであったが、その根底の思想は、「国家悪」（中央公論社、1956）「国家的忠誠」（岩波現代思想Ⅲ “民族の思想” 1957）以来、根深く用意されていたものとみることができる。
- ⑦ ニイチエについては夥しい評伝があるが、ここでの問題性に照らして、特にツヴァイク S. Zweig のものを挙げておきたい。in “Der Kampf mit dem Dämon” 1925
- ⑧ この辺の事情に、ニイチエの精神病すなわち進行性脳麻痺の発展との平行関係をみようとするものもある。ランゲ・アイヒバウム Lange-Eichbaum などはまさにこの種の専門医的考察であるが、トマス・マン Th. Mann の “Doktor Faustus” にもこの点を暗示する箇所が多数ある。しかし平行関係がみとめられるとしても、このような Freigeist への衝動が精神病的由来なのか、それとも Freigeist の結果が精神病であるのか、という問題はまだ決定的な解決をみているわけではない。
- ⑨ 特に F. Bollnow, Mensch und Raum, 1963 はこの点に全面的に論及している。